

宮城県文化財調査報告書 第65集

東北新幹線関係遺跡調査報告書  
— III —

昭和55年3月

宮城県教育委員会  
日本国有鉄道仙台新幹線工事局

## 序

道路及び鉄道交通網の整備事業は、現代社会の進歩発展からくる必然的な要請であり、県下でもこうした目的の建設事業が数多く計画実施されております。

しかしながら埋蔵文化財は、長い伝統のなかで青くまれた先人の貴重な文化遺産であり、その保存をはかり活用を考えていくことも現代に生きるわれわれの責務であります。

東北新幹線は仙台平野を南北に縦貫して通過する大規模な建設工事であり、関係する遺跡は28遺跡を数えます。これらの遺跡については、昭和47年以来発掘調査を実施し、路線敷については昭和54年5月で完了。付帯施設関連遺跡の調査も54年12月に完了し多くの成果を得ております。

本書は東北新幹線関係遺跡発掘調査報告書の第3冊目として「地蔵院館跡・内親引田遺跡・東館遺跡・上古川(延命地蔵)遺跡・留沼遺跡・中の茎B.C.D.遺跡・下折木遺跡・新庄館遺跡・葉坂戸の内遺跡」の各遺跡を収録しております。

ここに関係各位の御協力に深甚なる敬意を表わすとともに、本書が記録保存の成果として社会教育や学術研究の場に役立つことを切に願っているだいです。

昭和55年3月

宮城県教育委員会

教育長 北村 潮

## 目 次

### 序文

調査に至る経過 .....	1
1. 地蔵院館跡 .....	3
2. 内親引田遺跡 .....	29
3. 葉坂戸の内遺跡 .....	59
4. 上古川（延命地蔵）遺跡 .....	135
5. 留沼遺跡 .....	153
6. 中ノ茎B・中ノ茎C・中ノ茎D遺跡 .....	223
7. 東館遺跡 .....	243
8・9. 下折木遺跡・新庄館跡 .....	305

## 例　　言

1. 本書は東北新幹線関係遺跡の発掘調査報告書第3分冊として、11遺跡について作成したものである。
2. 遺跡の記載は南から順に行なった。
3. 掘調査は宮城県教育序文化財保護課（昭和47年度分は文化財保護室）が担当し、関係各市町教育委員会、各学校教職員、学生補助員の方々の協力をいたいた。
4. 調査および整理において、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所からご指導、ご助言を残った。
5. 石製品の材質同定は東北大学助教授蟹沢聰史氏にお願いした。
6. 土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を、土性区分は国際土壤学会法の基準を参照したものである。
7. 地図は建設省国土地理院発行の地形図を複製したものである。縮尺・地区は図中に注記した。
8. 整理・報告書の作製は文化財保護課調査係が行なった。各遺跡の整理・執筆分担は次のとおりである。

地藏院館跡—木安彦

内親引田遺跡—加藤道男、石川小夜里（整理補助員）

葉坂戸の内遺跡—佐々木安彦

上古川（延命地蔵）遺跡—千葉宗久

留沼遺跡—手塚 均

中ノ茎B・C・D遺跡—早坂春一

東館遺跡—加藤道男

下折木遺跡　高橋守克

新庄館跡

9. 上記遺跡については、現地説明会資料・調査略報などによってその内容の一部がすでに公表されているが、本書の内容がそれらに優先するものである。
10. 各遺跡の遺物・実測図・写真等すべての資料は東北歴史資料館に移管され、保管・公開される予定である。

## 調査に至る経過

日本の歴史を探るために埋蔵文化財の担う役割が非常に大きい。ところが埋蔵文化財は一度破壊されると、永久にその価値を失うものである。そこに埋蔵文化財の取り扱いの慎重さと保護の重要性がある。

昭和46年10月、日本国有鉄道から東北新幹線の予定路線の発表があり、文化庁と日本国有鉄道との覚書きにもとづき宮城県教育委員会が発掘調査を担当することとなった。

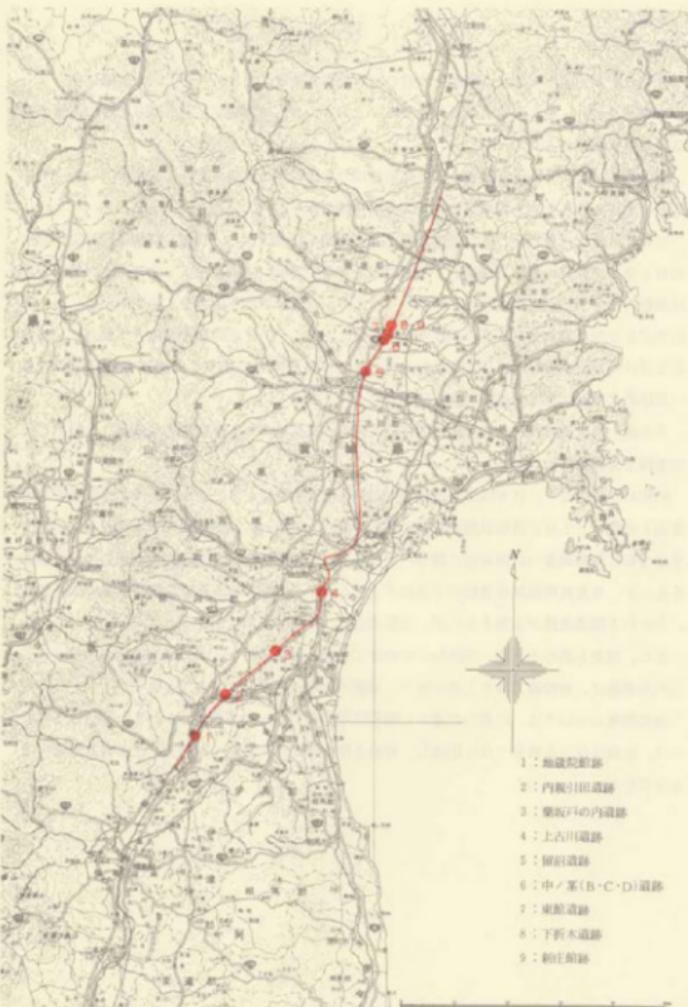
宮城県教育委員会では、先づ予定路線の分布調査を計画策定し、担当を関係市町村文化財担当者と分布調査員14名とで構成し、昭和47年1月までの間に実施した。しかし、この時点では路線敷のセンター杭が設定されていなかったため、調査結果は不確実なものであった。従って昭和47年2月以降センター及び幅杭が設定されたところで、文化財保護室調査係職員によって第2回目の分布調査を実施し、路線敷内に含まれる事前調査の必要な30遺跡を登録し報告書（宮城県文化財調査報告書第27集昭和47.3）を作成した。

その後、実質係りのない4遺跡を除外し、新たに発見された2遺跡を追加登録し最終的には28遺跡を発掘調査の対象とした。

昭和47年度に至り、日本国有鉄道から発掘調査促進の要望があり、5月には発掘調査の基本事項を協議し、7月に発掘調査の委託契約を締結し、8月から調査を開始した。翌年度以降は年度当初に発掘調査の計画策定に基づいて受託し、昭和54年5月第3次観音沢遺跡の発掘調査をもって、東北新幹線関係遺跡の全遺跡が完了した。その後、東北新幹線関係の養成所等建設にかかる関連遺跡が追加されたが、発掘調査は、昭和54年12月で完了している。

また、調査を進める一方、国鉄仙台新幹線工事局との協議によって、東館遺跡で検出された方形周溝墓は、新幹線工事の工法変更で、調査の上埋めもどし、現地保存をした。

遺物整理については、昭和53年度から昭和55年度まで3ヵ年を計画している。整理にあたつては、記録保存の性格を十分に配慮し、可能な限り詳細なデータを作成し、資料提示をするよう努めた。



東北新幹線関係遺跡位置図

(1) 地 藏 院 館 跡

## 目 次

I 位置と環境 .....	5
II 規模・構造 .....	10
III 調査の方法と経過 .....	15
IV 調査の成果 .....	15
V 考 察 .....	19

## 調査要項

遺跡名：地蔵院跡

宮城県遺跡地名表登載番号：02172

遺跡所在地：宮城県白石市斎川字地蔵院

調査面積：約 100m<sup>2</sup>（発掘面積 42m<sup>2</sup>）

調査期間：昭和47年3月3日～3月8日

調査員：宮城県教育庁文化財保護課

志間 泰治 佐々木安彦

## I 位置と環境

地蔵院館跡は、白石市の南約4km、国道4号線の西側、白石市齐川字地蔵院に所在する。館跡の所在する白石市は、ほぼ四周を東西の山塊（東—阿武隈山地帯、西—奥羽山地帯）からのびる丘陵によって囲まれた沖積低地を中心として展開する町で、中央低地は白石盆地とも総称される。この低地は、その中の北部を東流する白石川やそれに合流する小河川によって形成されたもので、標高50mほどであり、東西1～1.5km、南北4～5kmほどの規模をもつ。

白石川はその後北東方向へ流れおり、白石低地の北約3kmの宮地区で南流する松川を交え、大河原・船岡を経て概木で北流する阿武隈川に合流する。そしてその流域に規模の大小はあるが多くの沖積地を形成している。それらの沖積地は一括して概木低地ともよばれるもので、広義の仙台平野に含まれるものであり、この点からみると白石低地は、北部の仙台平野と連続しているといえる。

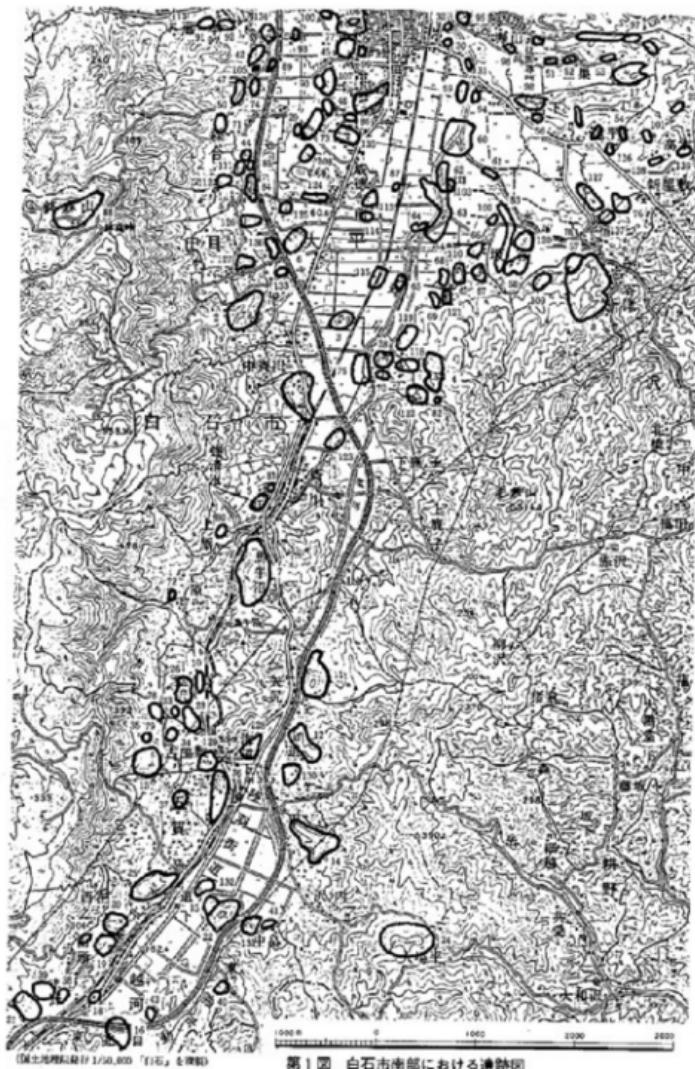
これに対し、白石低地の南部は標高300m前後の山並によってそののびを遮られている。山並は、東西の山塊が接する部分にあたるものであり、その間をぬうように標高100～200mほどの輻射状の街道が南北9kmにわたって走り福島盆地と連絡している。この街道筋は、古くは東山道、のちには奥州道そして現在は国道4号線として、太平洋岸を北上する東海道（江戸浜街道、国道6号線）とともに、南から仙台平野へ至る重要な交通路である。

即ち、白石低地は仙台平野の一翼としての経済基盤を備えると同時に、その南限を画すという交通上の要衝の位置を占めているといえる。

白石低地が古くから人々の活動の対象となったことは、低地内やその周縁に弥生時代以降多くの遺跡が存在していることからもうかがわれる。

特に古墳時代には、低地東部の眺望のよい丘陵上に古墳が密集して造営されている。主軸長56mの瓶ヶ盛古墳や、同44mの亀甲古墳（いずれも前方後円墳）をはじめとし、鷹ノ巣古墳群（40数基）や東丁古墳群、また時期的にはやや下降すると思われる郡山・黒岩横穴古墳群などの存在が知られている。これらはいずれも前面の低地を基盤として成立し光と考えられるのであり、それを裏付けるように、斎川流域の自然堤防上に立地する北無双作遺跡や田中遺跡などから古墳時代中期以降の土器が出土しており、また近年古墳時代前期の遺物の出土も確認されている（梅田遺跡）。<sup>註</sup>

次代の奈良・平安時代においても、多くの集落跡が低地内外から発見されている。それとともに郡山遺跡周辺においては瓦も出土しており、さらに低地部分に条里制に伴うと思われる地割の痕跡が認められるなど、この地域のもつ経済性に国家的支配が及んでいた様子がうかがわれる。



第1図 白石市南部における遺跡図

(国土地理院発行 1/50,000 「白石」を用ひ)

遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	立地	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	施設院跡	後丘陵	城	中世	26	馬場台跡	丘陵斜面	包含地	平安
2	志野村(二条城)	丘陵	城	中世	27	寺沢遺跡	丘陵斜面	包含地	備文(後)
3	坂越城跡	分離丘陵	城	中世	28	市野遺跡	丘陵斜面	包含地	平安
4	裏子城跡	丘陵	城	中世	29	大仁上遺跡	丘陵斜面	包含地	備文・平安
5	津河原跡	丘陵	城	中世	30	翁崎遺跡	丘陵斜面	包含地	備文
6	高木平城跡	分離丘陵	城	中世	31	打越城跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
7	萬竹寺跡	丘陵	城	中世	32	一本木遺跡	丘陵斜面	包含地	備文・近世
8	(小)山跡	丘陵	城	中世	33	松ヶ作人遺跡	丘陵斜面	包含地	備文
9	新屋跡	丘陵	城	中世・近世	44	古御所内遺跡	台地	神社跡	中世
10	乙森小屋跡	丘陵斜面	城	中世	45	瓦山遺跡	台地	包含地	奈良・平安・中世
11	塔宝庵跡	丘陵	城	近世	46	曾山遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
12	山道庵跡	丘陵	城	中世	47	赤坂石塚	丘陵斜面	石塚	古代・中世
13	奥沢小屋跡	丘陵	城	中世	48	馬ノ塚遺跡	丘陵斜面	土塚	中世
14	土善院跡	丘陵	城	中世	49	神明塚	丘陵斜面	土塚	中世
15	笠森小屋跡	丘陵	城	中世	50	鷺山経塚	丘陵斜面	經塚	平安
16	湯ノ皿跡	丘陵	城	中世	51	荒尾敷造跡	丘陵裏	包含地	奈良・平安
17	高野院跡	丘陵	城	中世	52	手取敷造跡	丘陵裏	包含地	奈良・平安
18	深山院跡	台地	城	中世	53	寺入尾敷造跡	丘陵裏	包含地	奈良・平安
19	羽音院跡	丘陵斜面	城	中世	54	宮在室遺跡	丘陵裏	包含地	奈良・平安
20	十輪院跡	丘陵斜面	城	中世	55	稻荷山遺跡	丘陵中腹	包含地	奈良・平安
21	空境遺跡	丘陵	城	中世	56	宮下遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
22	空谷露跡	丘陵	城	中世	57	五丁目遺跡	丘陵裏	包含地	奈良・平安
23	八幡院跡	丘陵	城	中世	58	坂下遺跡	丘陵斜面	台地	奈良・平安
24	小里院跡	丘陵	城	中世	59	白石沖縄跡	台地	包含地	奈良・平安
25	忍辱山院跡	丘陵	城	中世	60	谷津川遺跡	台地	包含地	備文・奈良・平安・中世
26	慶妙院跡	丘陵斜面	城	中世	61	江ノ下遺跡	河川敷	包含地	奈良・平安・中世
27	通史古墳群	丘陵斜面	前方後円墳	古墳・奈良	62	田中遺跡	丘陵裏	包含地	奈良・古墳・奈良・平安・中世
28	鬼園古墳群	丘陵斜面	前方後円墳	古墳	63	二大塚遺跡	台地	包含地	備文・奈良・平安・中世・古墳
29	櫛原山遺跡	丘陵中腹			64	大招前遺跡	台地	包含地	奈良・平安
30	裏子ヶ坂敷石遺跡	神野平野	門	古墳・奈良	65	才原遺跡	自然堤防	台地	奈良・平安
31	北無双作塗跡	神野平野	集落跡	奈良・平安	66	西在室山遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
32	鏡子ヶ坂敷石遺跡	神野平野	石碑・立石	古墳・奈良	67	久保沢遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
33	龜幸田遺跡	丘陵斜面	台地	備文(後)	68	久保沢山遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
34	猪谷前遺跡	丘陵斜面	台地	備文(後)・平安	69	才ノ入遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
35	西八重跡	丘陵斜面	包含地	備文(後)	70	赤平田遺跡	丘陵裏	包含地	奈良・平安

番号	通跡名	立地	種別	時代	遺跡番号	通跡名	立地	種別	時代
71	内田前通跡	丘陵面	包含地	奈良・平安	105	益田前通跡	丘陵	包含地	奈良・平安
72	道通跡	丘陵斜面	包含地	平安	107	八幡坂西通跡	丘陵地	包含地	奈良・平安
73	上東野前通跡	丘陵裏	包含地	奈良・平安	108	上東野前通跡	丘陵裏	包含地	奈良・平安
74	神岡通跡	台地	包含地	鶴文・奈良・平安	109	熊石通跡	山麓斜面	包含地	奈良・平安
75	龟泽西通跡	冲積平野	包含地	奈良・平安	110	堂任前通跡	丘陵	包含地	奈良・平安
76	塔ノ入古墳	丘陵中腹	円墳	鶴文(後)	111	北畠前通跡	丘陵	包含地	奈良・平安
77	白石城跡	台地	堀	近世	112	上観音前通跡	丘陵	包含地	奈良・平安
78	西B通跡	丘陵斜面	包含地	鶴文(後)・平安	113	高田通跡	丘陵端	包含地	奈良・平安
79	覚永寺跡	丘陵斜面	寺跡	近世	114	八少森通跡	山麓高地	包含地	奈良・平安
80	中森通跡	丘陵斜面	包含地	鶴文	115	才原B通跡	丘陵端	包含地	古墳・奈良・平安
81	西波通跡	丘陵裏	包含地	鶴文	116	稻荷山B通跡	丘陵	包含地	奈良・平安
82	長瀬寺跡	丘陵中腹	寺跡	近世	117	横根通跡	丘陵	包含地	奈良・平安
83	五谷古墳群	丘陵裏	円墳	古墳	118	鬼田通跡	丘陵	包含地	古墳・奈良・平安
84	峯ノ内通跡	台地	包含地	鶴文・奈良・平安	119	小山田通跡	丘陵端	包含地	奈良・平安
85	コムギ原通跡	台地	包含地	鶴文	120	志在家通跡	丘陵	包含地	鶴文・奈良・平安
86	新鎌西通跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安	121	石富前通跡	丘陵端	包含地	奈良・平安
87	松田通跡	台地	包含地	鶴文	122	荒置敷通跡	丘陵端	包含地	奈良・平安
88	峰森山陣屋跡	丘陵	陣屋跡	中世	123	竹ノ花通跡	山麓高地	包含地	奈良・平安
89	中臣敷陣屋跡	台地	陣屋跡	近世	124	成得寺前漢跡	丘陵	包含地	奈良・平安
90	八幡坂西陣屋跡	丘陵端	陣屋跡	近世	125	北里敷陣屋跡	丘陵状地	包含地	奈良・平安
91	浅見音真通跡	丘陵裏	包含地	鶴文	126	中原通跡	丘陵	包含地	奈良・平安
92	御廟通跡	丘陵裏	包含地	鶴文	127	伊原通跡	丘陵	包含地	奈良・平安
93	星敷前通跡	台地	龜落跡	鶴文(後)	128	矢尻通跡	丘陵端	包含地	奈良・平安
94	梅田通跡	台地	包含地	伴生	129	吉忍敷通跡	丘陵	包含地	鶴文(學)・奈良・平安
95	舟山通跡	台地	含屋跡	鶴文	130	山道通跡	丘陵	包含地	奈良・平安
96	和實通跡	丘陵裏	包含地	奈良・平安	131	雲省山通跡	丘陵端	包含地	奈良・平安
97	坂内御敷通跡	丘陵斜面	包含地	鶴文(學)・奈良・平安	132	山鳥岡通跡	平地	包含地	奈良・平安
98	三島通跡	丘陵	包含地	鶴文・奈良・平安	133	唐波忍敷通跡	丘陵状地	包含地	奈良・平安
99	中寺前通跡	台地	包含地	奈良・平安	134	下岸通跡	丘陵	包含地	奈良・平安
100	益西西通跡	台地	包含地	奈良・平安	135	上久保通跡	丘陵端	包含地	奈良・平安
101	小在家通跡	丘陵中腹	包含地	奈良・平安	136	館前通跡	丘陵端	包含地	奈良・平安
102	葛松通跡	台地	包含地	奈良・平安	137	宵通跡	丘陵	包含地	奈良・平安
103	田中瀬集落跡	自然斜面	集落跡	中世	138	佐野瀬通跡	丘陵	包含地	奈良・平安
104	山瀬通跡	丘陵中腹	包含地	平安	139	妙作通跡	丘陵	包含地	奈良・平安
105	月心院通跡	丘陵中腹	寺院跡	後世					

この地域に関する政治的事件として大きなものは、文治五年奥州合戦であろう。文治五年（1189）、源頼朝は、厚樺山・四方坂の戦で、平泉軍を破り奥州支配の足がかりを築いた。この地城はそれまでは平泉勢力下にあったと考えられ、この後鎌倉政権下に組み入れられることになる。頼朝は戦の後、舟迫を経て多賀国府へ入るが、その経路は厚樺山からまさに白石盆地を縦断しているのであり、この地域の交通上のもつ性格を如実に示している。なお鎌倉期にこの地に下向した御家人は刈田氏（本姓中条）であろうということが考えられている。

さらに降って、南北朝期には北畠顕信が一時、市東部に所在する三沢城に拠ったことが文献にあらわしております、この地が争乱の舞台の中におかれただけが考えられる。南北朝末期頃にはこの地城は伊達氏の支配するところとなつた。しかし、伊達支配となつた後にも、伊達稙宗・晴宗父子が争つた天文の乱（1542～1548）の際には、晴宗が攻撃を逃れて一時西山城（桑折赤館）から白石城へ入つた時期があるなど、まさに戦乱の渦中にあつた。戦いは、晴宗方有利で和解が成立し、決着するのであるが、以上のような混乱状態が盆地周辺に多くの館跡が存在することと関連するのであろう。館跡以外の遺跡としては東北古窯跡などの陶器生産遺跡や、中世にまで遡ると考えられている環濠集落などがあるが、それらもまた、この地域の経済性を背景にしたものと考えられる。

このような地域のもつ特色とそれから成立する政治的な特色は近世にまで継続しており、白石城が仙台城とともに、仙台領内二ヶ城のうちの一つとして廃藩時まで存続したことにも示されている。

地蔵院館跡はこのような歴史的環境のもとに存在する館跡である。特にその存在する地域は盆地南部で、まさに低地に対する南からの入口部分にあり、周辺には、白石市内62城のうち20数ヶ城が密集して分布していることからみてもこの地域の重要性がうかがわれる。

館跡は盆地南部のうちでも西部丘陵上に位置する。この部分には標高560mの鉢森山やそれに連続する同程度の標高をもつ山々から、ほぼ均一の傾斜をもつて広がる裾部がのびている。裾部の端は小支谷によって多数に分割されており、また若干の凹凸もみられる。その突き出した部分に本館が立地しているのであり、低地に向つて開く半月形の形態を呈している。標高は約100m、水田部との比方約40mで、頂部からは、北に白石盆地をほぼ一望することができる。

また北約1.2kmに所在する泰平館も同様の立地条件をもつものである。

註） 白石市教育委員会教示

## II 規模・構造

すでに述べたように本館跡は、低地西縁南部の平地に若干つき出した台地上に立地している。突出台地はその基部でわずかにくびれ、また先端部ではさらに南北に二またにわかれていたため、その上に立地する館跡は、東方の低地に向って開く半月形の形態を示している。基部北端の標高が最も高く(100m)東・南へ向って徐々に高さを減じる。

台地の南北には小支谷が入りこんでいるが、館跡はその谷を南北界とし、また西部では幅10～20mほどの堀によって丘陵と画している。南北の谷部分においても、人工的に台地裾を整形した痕跡は明瞭であり、特に南辺の大部分は堀としての形態を備えている。

東辺は、北、南で台地が分岐し低地に接している。ただし、両台地ともその基部で館跡を巡る堀または谷に連続する堀によって切断されている。両台地間の凹部斜面には数段の階段状遺構が配置されている。段状遺構は北斜面にも認められる。

なお、両台地の東先端部はいずれも国道4号線によって二分され、また宅地化が著しく、明確に館としての遺構を確認することはできない。したがって、館跡の範囲は、この突出台地を含めると、南北約370m、東西200mほどとなるが、除外すると250m×160mほどになる。

館跡を構成する主要な遺構としては、台地頂部に平場・土壙があり、その他に先に述べた館跡を巡る堀・堀切、北・東斜面の階段状遺構がある。

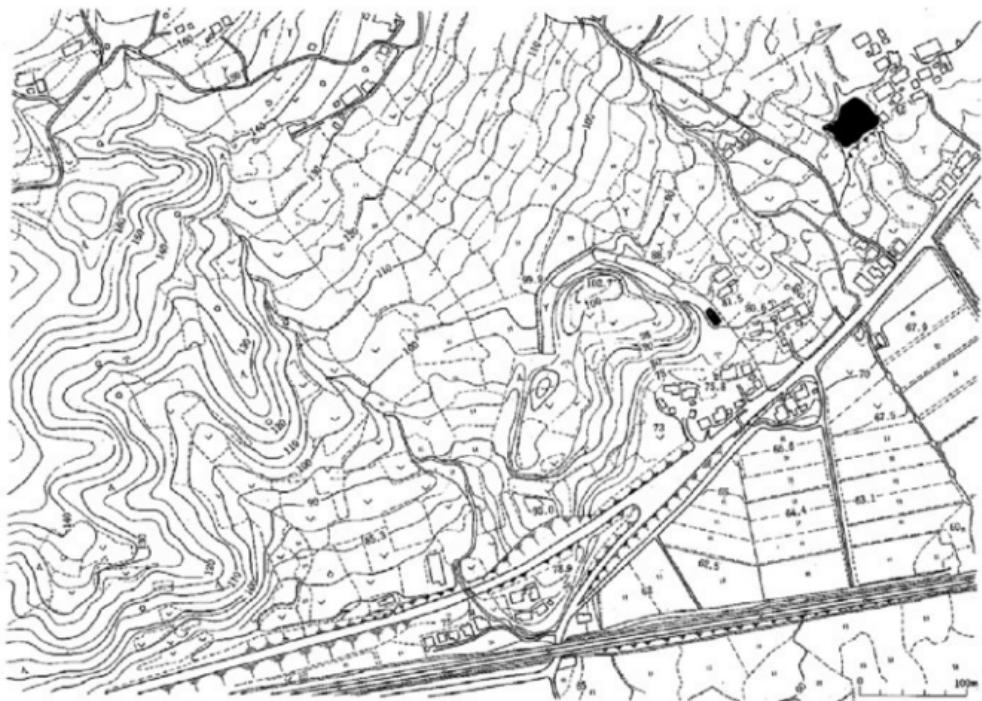
### 〔頂部平場〕

台地頂部に北から西・南にかけて細長く造り出されている。全体としては台地の形態に応じて、北部と南部で東へ広がっている。また中央部分でわずかに張り出したE字形を呈しており、大きく3地区にわけられる。西縁端が高く(約100m)東にのびるにしたがって低くなる。北部の平場が80m×40mほどで最も面積が大きく、また平坦で本館における主要な平場とみることができる。

これに比して、中央部・南部の平場は後世の畑地造成等によって原状が失われた部分もあるが、やや傾斜もあり、平場自体としては整然としたものではない。面積的には中央部が30m×70m、南部が70m×50mほどである。

これら3平場は幅20mほどの尾根状の平場によって連続している。

平場内には土壙状の遺構が確認される。土壙上遺構は北部平場の北面から西辺を走り、南部平場北端で途切れる。延長約140mである。さらに、南部平場南辺にも約20mの長さで認められる。途切れる部分は約55mほどであるが、北からのびる土壙状遺構南端には、さらに約15mにわたって削平を受けた痕跡が認められる。このことから本来は、この遺構は連続して西平場の北辺から西辺を経て南辺まで巡っていたと考えられ、その総延長は約210mに達する。土壙状遺構の



第2図 地蔵院館跡平面図と周辺の地図



第3図 地蔵院鉱跡トレンチおよび遺構配置図

現状は上幅1~4m、下幅4~10m、高さは2~3.5mである。

なお、この土壘状遺構は平場縁辺ではなく、それより2~10m内側を走っており、その間は外側に傾斜する平坦面になっている。つまり土壘状遺構は平場の尾根部分に配置されている。

#### 【堀および堀切】

堀跡は館跡の外縁部に巡っている。全体的にはほぼ地形に沿って円弧を描いているが、西辺中央ではするどくL字形に屈曲している。現状では上幅15~20m、下幅6~10m、平場との比高8~10mである。底面は西部の丘陵に接続する北西部で最も高く、北辺東端、南西辺南端とでは5m前後の落差がある。

堀切は、東側にのびる南北の突出台地を切っているものである。北側のものは館を巡る堀に連続しており、上幅9m、深さ1mほどで小規模である。

南側のものは、堀跡より約2m高く上幅20m、深さ4mほどの規模の大きなものである。両堀切とも台地を切断したのちは、館跡東斜面部分で開く。

#### 【斜面の段状遺構】

段状遺構は、北斜面および東斜面に認められる。

北斜面のものは2段認められる。上位のものは平場より4m下位にあり、長さ20m余、最大幅6mほどの小規模なものである。下位のものはさらに5mほど下位にあり、北辺のほぼ全体に配置されている。規模は長さ約90m、最大幅2mほどである。

東斜面の段状遺構は、南北で東に張り出す台地にはさまれた凹部に認められる。この地区は畠地造成によって地形が変化しており不明確な点が多いが、東辺南部から南辺にまわりこむものが1段確認される。頂部平場より10mほど下位にあり延長80mほどのものである。幅は2~8mで一定しないが、後世における改変による部分があることにもよるためであろう。

なお、館跡に至る主要通路および内部に拾ける通路等については明確に確認することができなかった。

また、堀切によって切断されたのち東側へのびる南北の台地部分についても、すでに述べたように原状の改変が著しく遺構の有無等については確認できない。

このように本館跡は、頂部平場を中心として、山側には堀を配してそれを区画し、低地側には段状遺構を配した斜面をもって区画しているものである。頂部平場は広い面積をもち、さらに数フロックにわけることはできるが、その間を土壘状遺構が連続してのびていることから同一の平場と考えられる。総じて本館跡は、一つの平場とそれを囲む防禦線を有しただけの単純な構造をもつものとみることができる。



第4図 地蔵院跡の主な遺構配置図

### III 調査の方法と経過

地蔵院館は昭和42年に実施された東北自動車道を中心とする分布調査によって発見され、遺跡として登録された（宮城県教委：1968）ものであるが、そのうちの一部が東北新幹線路線敷内に含まれることが明らかとなり、発掘調査が実施されることになった。今回の発掘調査は、路線が館跡の北西端をトンネルで通過することになるため、その出入口が設けられる部分について実施した。その部分は、館跡を巡る堀遺構の北辺西部、西辺北部にあたる。発掘は路線中心杭を基準として、西辺北部（第1地点）にAトレンチ（中心杭280.94kmから北へ3m）、北辺西部（第2地点）にBトレンチ（中心杭281.02kmから北東へ5m、281.04kmとの間）を、堀と直交して設定し調査を行った。その結果、Bトレンチでは凸帯状の遺構が発見され、それがトレンチ外にのびたため、新たにCトレンチをBトレンチに直交するように設定した。

調査期間は昭和47年3月3日から3月8日まで、実発掘面積は42m<sup>2</sup>である。

### IV 調査の成果

#### 第1地点 Aトレンチ

2×8mトレンチである。調査の結果、表土から20～30cm下の地山（岩盤）に掘りこまれた堀跡を確認した。堀は岩盤から深さ約1mのものであり、現在の斜面裾部から約2m外側の部分で落ちこんでいる。底面はほぼ平坦でわずかに西側へ傾斜している。また壁は直線的に開きその角度は約35°である。堀の幅については路線外にのびるため確認できなかった。

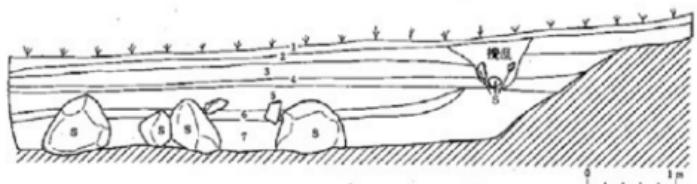
堆積土の状況は、上部（4層まで）ではほぼ水平に堆積しており、下部（5層以下）では堀中央部へ向って傾斜して堆積している。また底面には大きさ0.4～0.9mの山石が入っている。

#### 第2地点 BトレンチおよびCトレンチ

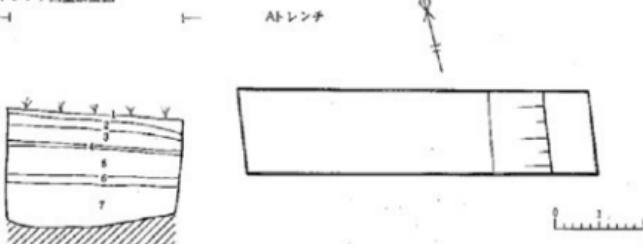
当初2×7mのトレンチ（Bトレンチ）を設定して調査を行った。その結果、表土から深さ約1mのところで凝灰岩質の岩盤に達したが、発掘が進むにつれて、これはトレンチと並行に岩盤を削り出した凸帯状の遺構であることが明らかとなった。そのためBトレンチの中央に直交する3×6mのCトレンチを設定して、その規模・形状等の把握を行った。この遺構は堀内に岩盤を逆台形に削り出して造り出したもので、堀に直交している。その規模は北側0.3～0.6m、下幅2.6～2.9mのもので、長さ6mにわたって確認した。遺構上面は北側（堀外側）では、大きく広がつて堀上端に連続している。南側（堀内側）はトレンチ外までのびている。この遺構をはさんで東西両側の堀底面との高さが異っており、西側では高さ1m、東側では2.5～3mである。

また遺構上面には、遺構ののびに直交して幅0.8m、上面からの深さ0.6mの溝状の切り込み

Aトレンチ北壁断面図



Aトレンチ西壁断面図



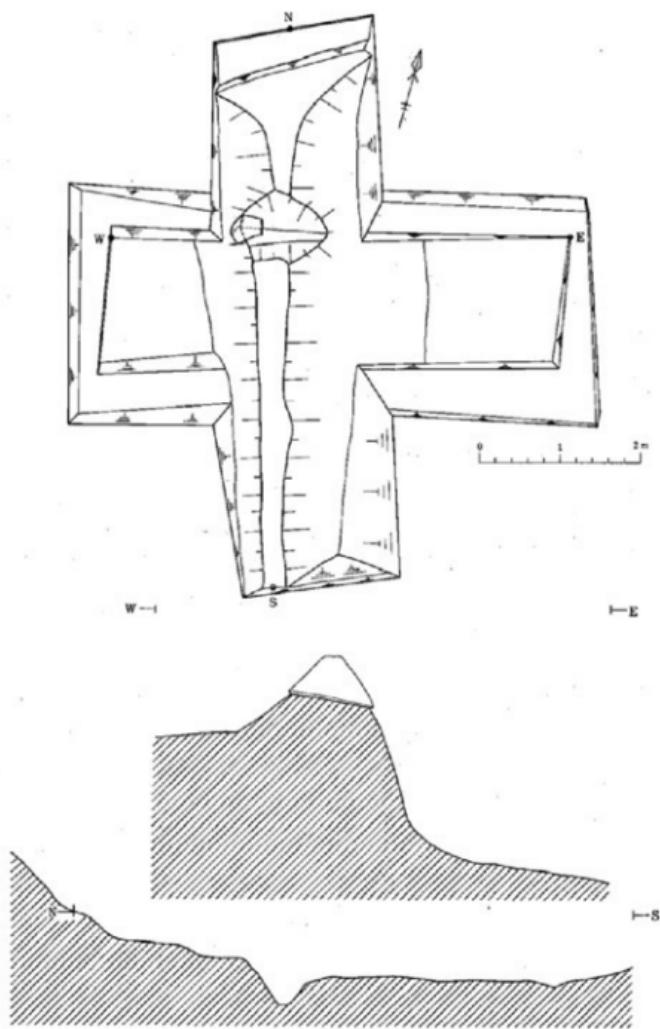
層位	土色	備考
1	黄土	
2	褐色	蘿蔭村の性を含む
3	茶褐色	わずかに炭化物を含む
4	赤褐色	粘土質で赤・黄・灰色の粒のブロックが混入全体として各種をしている
5	黄色	粘土質で深色の比較的大きな粒を含む
6	黒色	
7	青色	米ぬか土のブロックが混入

第5図 Aトレンチの堆積構と断面図

が加えられている。

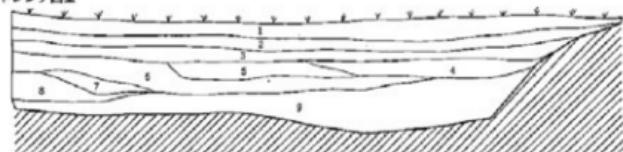
堀内の堆積土はAトレンチにおいて認められたのと同様、上部は水平に、下部では堀中央部へ向って傾斜して堆積している。下部には大小の自然木が混入している。

なお、第・第2地点とも出土遺物はない。

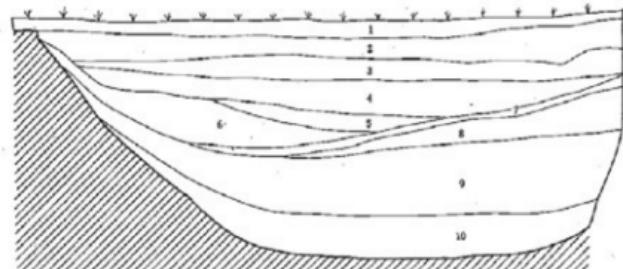


第6図 B・Cトレンチの遺構とその断面図

B トレンチ西壁



B トレンチ東壁



西壁

層位	土 色	特 性
1	褐 色	褐色の粘土上にブロック混入 硬 土
2	灰 褐 色	灰色の粘土を多く混入
3	赤 褐 褐 色	灰色の粘土をわずかに混入
4	赤 褐 色	青色にメリ化した粘土質のブロックを多量に混入
5	赤 褐 色	
6	赤 褐 色	粘土質で軟化鉄のような赤色をしている
7	黄 色	青色の粘土上のブロック混入がない
8	黄 色	褐色土のブロックが混入
9	灰 色	粘土質

東壁

層位	土 色	特 性
1	褐 色	土
2	灰 褐 色	赤褐色土の粒を含みわざかに砂質である
3	赤 褐 色	埋入焼化鉄を含む
4	赤 褐 色	粘土質で黄色粘土質の粒子を混入
5	赤 褐 色	赤褐色粒子焼化鉄を多量に混入
6	棕 褐 色	赤褐色粒子混入
7	暗 黒 色	粘土質
8	青 色	砂質上で青色の粒子混入
9	灰 黑 色	粘土質
10	褐 黑 色	粘土質

第7図 B トレンチ東・西壁土層断面図

## V 考 察

### 〔発見された遺構〕

今回の発掘調査によって発見された遺構は、堀およびその中に付設された凸帯状遺構である。いずれの遺構もトレンチ外までのびているため、その規模については明確にできなかった。

堀跡は、Aトレンチにおいては深さ約1m、Bトレンチでは1~2mである。ただし、すでに述べたように堀底面は場所によってその高さを違えている。

B・Cトレンチで発見された凸帯状遺構は、堀に直交していること、また上面に溝状切り込みがみられることから、水をせきとめることを意図して付設されたものと考えられる。このことは、館跡を巡る堀は水堀として機能していたことを示しているものであり、北西隅から徐々に傾斜する堀にその機能を存続させるために、同種の遺構は堀内の各所に存在することが予想される。

なお、堀が水堀であったことは、堀内から多くの木片等が出土していることからもうかがわれる。また堀内の上部に着ける水平堆積層は、堀が機能しなくなったのちの水成堆積層であろう。

同種の遺構は遠田郡小牛田町山前遺跡（小牛田町教委：1976）に見い出すことができる。山前遺跡場合は古墳時代前期に属し、集落を画する溝と考えられているものである。溝中にそれと直交し、多くの「堰」が造り出されている。それらには本館跡の場合と同様、上面に溝状切り込みを有すものも多い。そして堰をはさんだ溝底面は高さに違いが認められることから常に湛水状態を保つための機能を有する遺構であり、溝のもつ防禦的機能をより増す施設であると理解されている。

城館跡における類例としては、静岡県三島市山中城跡（三島市教委：1978）があげられる。同城跡は、戦国時代末期に北城氏が創築したとされるもので、西櫓を巡る堀跡等に認められ、機能的にはさらに堀内における敵の通行を妨げる効果をも想定している。なお同城跡においては、この種の遺構を「敵」とよび「敵」の設置された堀を「敵堀」とよんでいる。

### 〔館跡の性格・年代について〕

立地上からみた館跡のもつ性格については「位置と環境」で述べた通りである。

次に館跡の構造についてみると、構造上の特色については、頂部平場とそれを区画する堀等の防禦施設から成る単純な構造のものであり（東斜面の南北に突出する台地については、地形的にみて館内に含まれる可能性はあるが、明確な遺構が確認できず、館内に含めて考えることが妥当であるかは不明であるため、ここでは除外する）広い平場面積を有することがあげられる。このことは、立地上全く平地と隔離された自然地形に選地しているものではなく、比較的

低地に近いことをあわせて考えると、居住に際しての便利性が保たれているとみられる。

さらに、堀内に施設を施すといったこれまでに県内で調査された館跡に比して、比較的丁寧な作りをもつ堀を備えている点も特徴の一つであろう。

これらのことから本館は、争乱期ではなくある程度安定した時期に築城が行われ、一定期間居住していたことを想定することが可能であると思われる。この居住性については北方4kmあり、比高40mの独立丘を立地条件とし、平場面積も狹少な飯詰館跡（阿部：1980）と対象的である。

本館それに関する記録・伝承等は現在のところ確認されていない。また発掘調査によつても遺物は発見されず、年代については全く不明である。ただし、「仙台領古城書上」等に記載がないことから、近世にまで存続したものではない。したがつて中世のある安定した時期に成立し、構造が単純であり、改築等が行われた形跡がうかがえないことから、さほど長期に及ばず廃されたと考えたい。

### 引用・参考文献

- 阿部 恵 (1980) : 『飯詰館跡』宮城県文化財調査報告書第62集東北新幹線関係遺跡調査報告書』II
- 小牛田町教育委員会 (1976) : 『山前遺跡』
- 白石市史編さん委員会 (1979) : 『白石市史Ⅰ・通史編』
- 三島市教育委員会 (1978) : 史跡山中城跡 史跡公園基本構想
- 宮城県教育委員会 (1976) : 『宮城県遺跡地名表』宮城県文化財調査報告書46集

図 版



地蔵院館跡全景  
(右下に赤館跡が  
見られる)



西侧からの全景  
(左端には坂越跡が  
見られる)



頂部平場  
坂越道場  
(国道4号線から)



東部南端の平場  
(西側から)



頂部平場南端の堀切  
(西側から東側を見る)

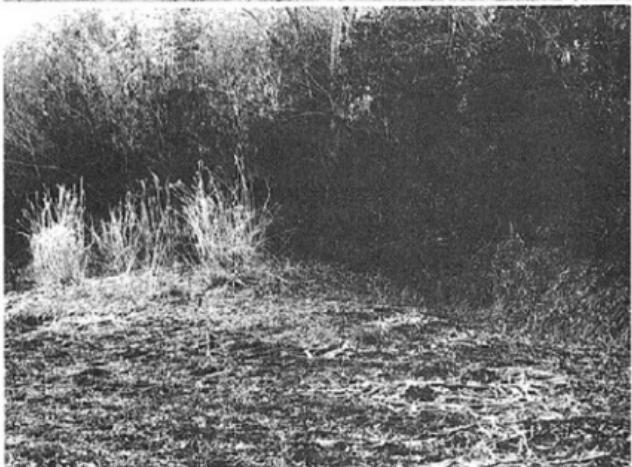


頂部平場北端の堀切  
(南側から北側を見る)

図版2



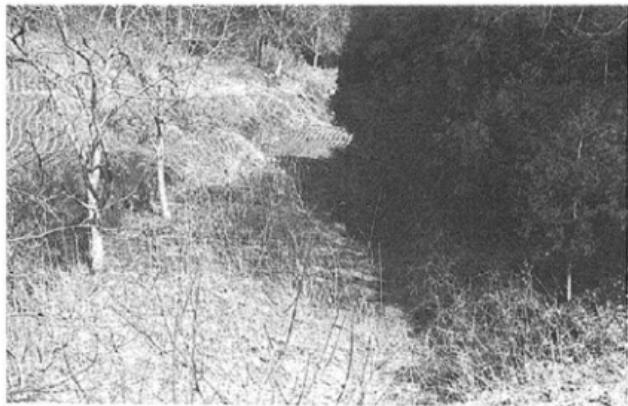
頂部平場西側の塙遺構  
(南側から)



塙遺構  
(屈曲する付近)



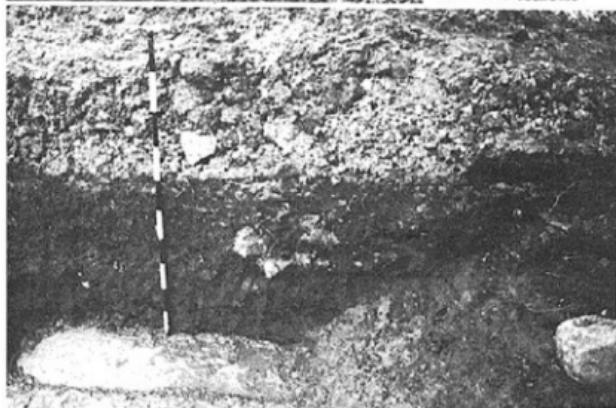
塙遺構  
(西側から東側を見る)



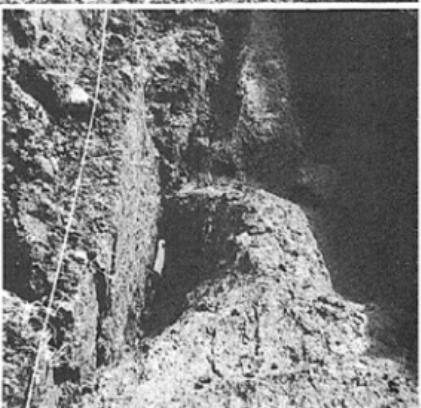
A トレンチ設定場  
(施設構内)

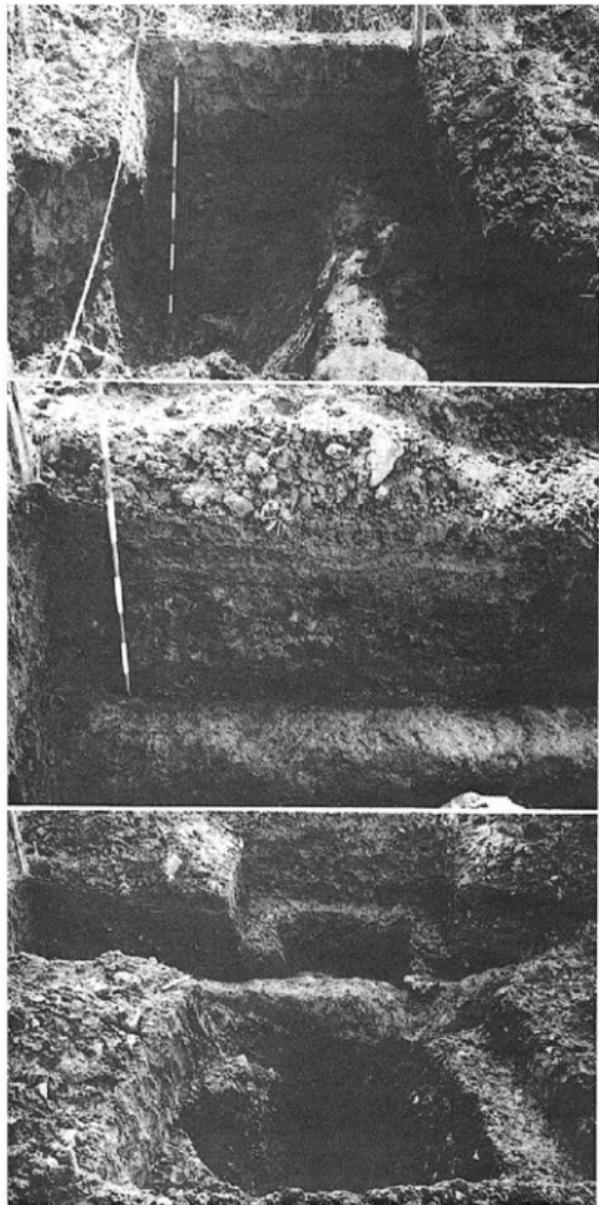


A トレンチ発掘状況



A トレンチ施設構  
(立ち上がり部分)





B レンチ南側セクション  
(凸帯状遺構の落ち込み)

B レンチ西側セクションと  
凸帯状遺構

C レンチ  
凸帯状遺構東側から西面を見る



凸帯状造構  
(南側から北側を見る)



C トレンチ西側南壁セクションと凸帯状造構



B・C トレンチ発掘状況

(2) うち おや ひき た  
内 親 引 田 遺 跡

## 目 次

I 位置と環境.....	33
II 調査の経過.....	33
III 発見された遺構と遺物.....	36
1. 堅穴住居跡.....	36
2. ピット.....	45
3. 表土・層位不明の遺物.....	45
IV 考 察.....	47
1. 出土土器の分類.....	47
2. 出土土器の年代.....	48
3. 堅穴住居跡の構造.....	48
4. 遺構の年代.....	49
V まとめ.....	50

## 調査要項

遺 跡 名：内親引田遺跡

宮城県遺跡地名表登載番号：02151

所 在 地：白石市内親引田

遺跡記号：AR

調査面積：約2,000m<sup>2</sup>（発掘面積444m<sup>2</sup>）

調査期間：昭和47年8月8日～9月19日

調 査 員：宮城県教育庁文化財保護課

    佐藤庄一・佐々木安彦・遊佐二郎

調査参加者：泰 昭繁



(国土地理院地図 1/25,000 「大河原」を複数)

第1図 遺跡の位置

## I 位置と環境

内親引田遺跡は国鉄東北線白石駅の北東約5.7km、白石市内親字引田に所在する。

白石市の北東部には三方から丘陵がせまっている。その一方は南の阿武隈山地帯から続く小起伏丘陵（角田丘陵）であり、また、北には高館丘陵からのびる小起伏丘陵（愛宕山丘陵）、北西には藏王火山地から続く小起伏火山地がある。これらの間には白石川およびこれに合流する松川などの河川が流れ、沖積地を形成している。

内親地区は角田丘陵の北西部にあたり、丘陵端は同地区で東西二つに分校してそれぞれ北方に突き出し、その間には沖積地が入り込んでいる。

内親引田遺跡は分枝した東側の丘陵の西斜面に立地している。遺跡付近はなだらかな斜面であり、標高は遺跡中央部で約35m、西側水田との比高は約10mである。現状は畑地となっている。

同遺跡の立地する丘陵上には他にいくつかの遺跡が知られている。安久戸遺跡・郡山地区の横穴古墳群、根城館跡などであり、それらの多くは丘陵裾部に立地している。

## II 調査の経過

調査は昭和47年8月8日に開始した。

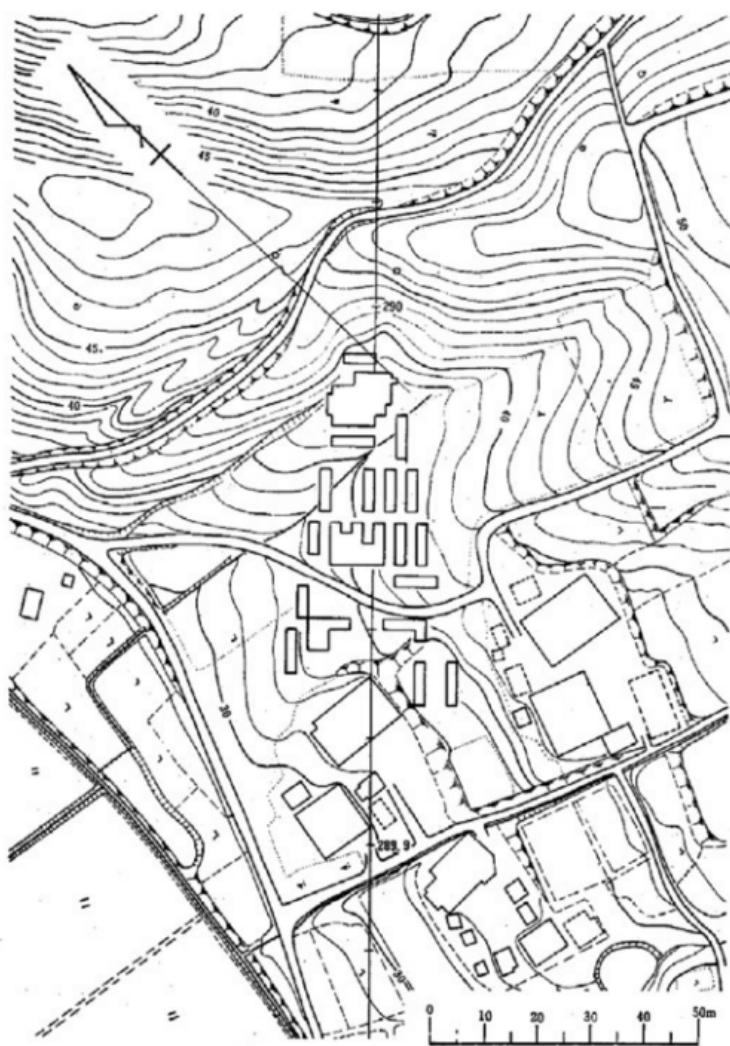
調査対象範囲は南北が66m、東西が北側で20m、南側で40mの約2,000m<sup>2</sup>である。雑草を除去したのち路線の中心杭を基準として2m単位のグリッドを組んだ。次にグリッドを数個つなげたトレンチを設定して表土除去作業を開始した。

作業が進むにつれて各トレンチとも表土下から地山面が現われ、遺構は地山面で竪穴住居跡が3ヶ所で確認された。その後、拡張を行なって住居跡全体の輪郭を検出し、精査を開始した。

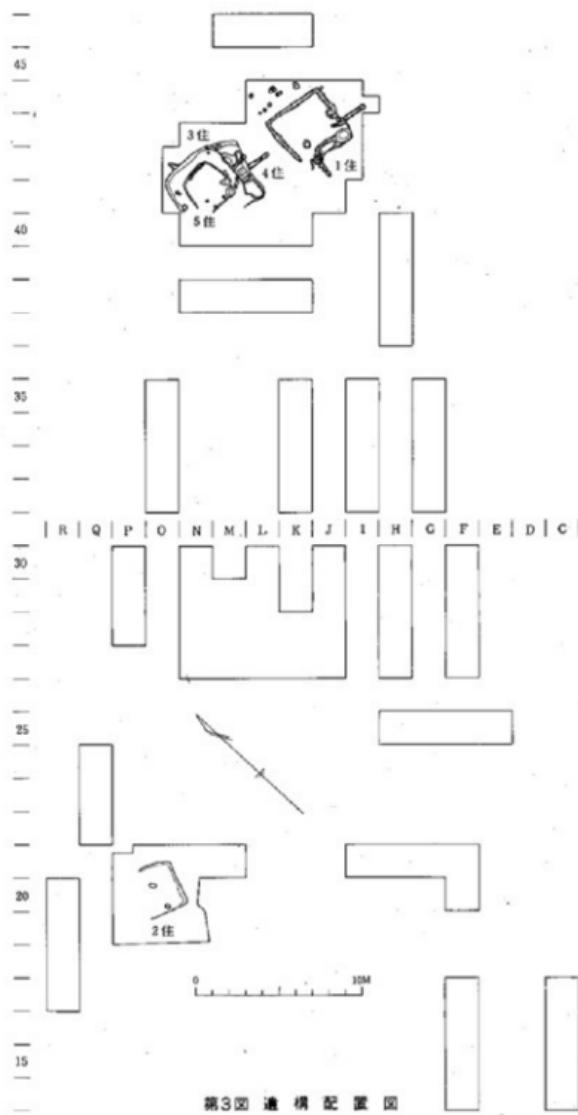
精査の過程で、3ヶ所の住居跡のうち2ヶ所は1軒づつ検出され、他の1ヶ所では3軒の重複が確認された。

精査終了後、実測図の作成および写真撮影を行なって9月19日に調査を終了した。

発掘面積は約444m<sup>2</sup>、発見された遺構は竪穴住居跡5軒、ピット10個である。



第2図 内親引田遺跡地形図・グリット配置図



第3図 遺構配置図

### III 発見された遺構と遺物

#### 1. 竪穴住居跡

##### 第1号住居跡

【位置】 西斜面上のK-43区周辺で検出された。

【重複・増改築】 認められないと。

【平面形・規模】 平面形はややゆがんだ正方形で規模は長軸約3.6m、短軸約3.4mである。

【壁】 南東部は検出されなかった。地山を壁としている。壁高は最も高い北東隅で56cmで、ほぼ垂直に立ち上がり、下端は丸味をもつ。

【床面】 地山を床とし、床面はほぼ平坦であるが、床面金体が北東から南西に向って傾斜している。

【柱穴】 床面からはピットが1個検出されている。柱痕跡も確認されておらず、他に組み合うものもないことで、柱穴がどうか不明である。

【周溝】 周溝は、北、東、西辺にみられる。各辺においては住居壁に沿い、断面形は一定せず、底面幅は10~15cmで、床面からの深さは10cm前後である。

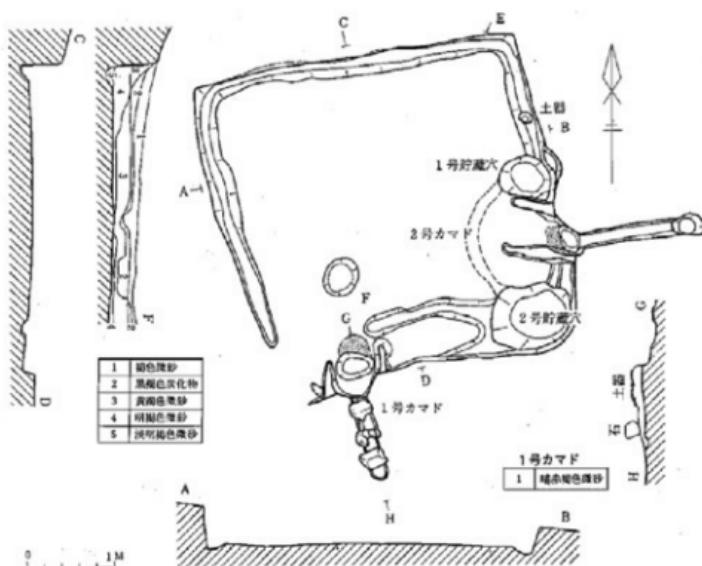
【カマド】 南壁と東壁に2基検出された。この2基のカマドの新旧関係は不明である。

第1号カマド南壁西よりに位置し、燃焼部と煙道部から成る。燃焼部は約80cm、奥行き60cmで、側壁は粘土で構築され、奥壁は外側に張り出している。燃焼部底面には、中央にピットがあり、その手前が径40cmの範囲で焼けている。煙道部は長さ90cm、幅20cmで燃焼部底面より一段高い部分からのび、底面は水平である。天井には3個の甕と4個の川原石をかぶせている。

先端に煙り出しピットがみられる。軸方向はS-120-Eである。

第2号カマド東壁南よりに位置し燃焼部と煙道部から成る。燃焼部は幅約70cm、奥行き約50cmで側壁は住居の壁に対し斜に取り付いており、粘土によって構築され、奥壁は外側に張り出している。燃焼部底面には奥壁に接してピットがあり、その手前に約30×20cmの範囲で焼面がみられる。燃焼部にはその規模よりかなり大きい掘り方が検出されている。煙道部は長さ1.4m、幅20cmで燃焼部底面より一段高い部分からのび、煙道部底面は先端に向ってわずかに高くなる。先端に煙り出しピットがみられる。軸方向は燃焼部が-80°-E、煙道部がN-82°-Eである。

【貯蔵穴状ピット】 第2号カマドの左右に検出された。1号貯蔵穴は第2号カマドの左側に位置し、遺物は出土していないが、堆積土には焼土・木炭が含まれている。2号貯蔵穴は第2号カマドの右側に位置し、遺物が出土している。



第4図 第1号住居跡

## 〔出土遺物〕

## 土器器

**坏**: いずれも製作にロクロが使用されている(1~3)。体部から口縁部まで外傾し、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。底部は回転糸切り技法で切り離され、再調整はみられない。ロクロの回転方向は右である。

**壺**: 製作にロクロが使用されているもの(6、7)と、使用されていないもの(4、5)とがある。

前者は最大径が口縁部にあり、口径が器高より大きい。口縁部から体部にかけては、内外面ともロクロ調整されている。底部は右が残存しているが、磨滅が著しく調整の観察ができない。

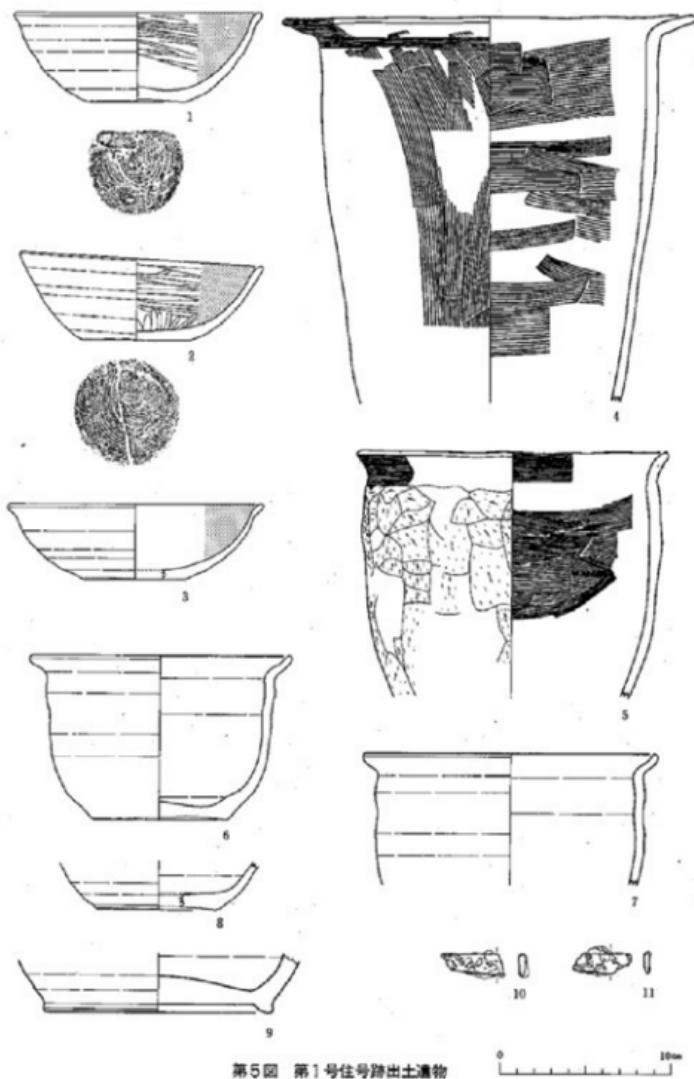
後者は最大径が口縁部にあり長胴形と思われる。体部の調整は外面が刷毛目あるいはヘラケズリ、内面が刷毛目である。

## 須恵器

**坏**: 底部の破片である(8)。底部は回転糸切り技法で切り離され、再調整はみられない。

**壺**: 底部の破片である(9)。低い高台が付けられている。

**鉄製刀子** (10・11) 身の被片である。いずれも錆化が激しいが、平造と思われる。



第5図 第1号住居跡出土遺物

### 第2号住居跡

【位置】 西斜面上の0-20区周辺で検出された。

【重複・増改築】 認められない。

【平面形・規模】 西壁が失われているが、平面形は方形を基調とするものと考えられ、規模は東西約2.8mである。

【壁】 地山を壁としている。壁高は最も高い南東隅で31cmであり、立ち上がりはゆるやかである。

【床面】 地山を床とほぼ平坦で、東から西に向ってわずかに傾斜している。

【柱穴】 床面上からピットは検出されなかった。

【カマド】 検出されなかった。

【貯藏穴状ピット】 認められなかった。

そのほか、住居中央と南壁近くに大小4個の川原石があり、床面にのっている。

### 【出土追物】

#### 土師器

**壺**: いずれも製作にロクロが使用されており、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。底部の切り離し技法は回転糸切り（1）、再調整のため不明（2）の二者がみられる。回転糸切りのものは体部下端に、不明のものは体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリが加えられている。

**甕**: 製作にロクロが使用されているもの（5）と使用していないもの（3、4）がある。

前者は最大径が口縁部に位置する。外面にロクロ調整がみられる。内面の調整は不明である。

後者は底部破片である。底部にムシロ状圧痕がみられる。

#### 須恵器

**壺**: 底部の切り離し技法は、ヘラ切り（6、7）と回転糸切り（8）がある。いずれも再調整はみとめられない。

**甕**: いずれも体部下半から底部にかけての破片である（9、10）。

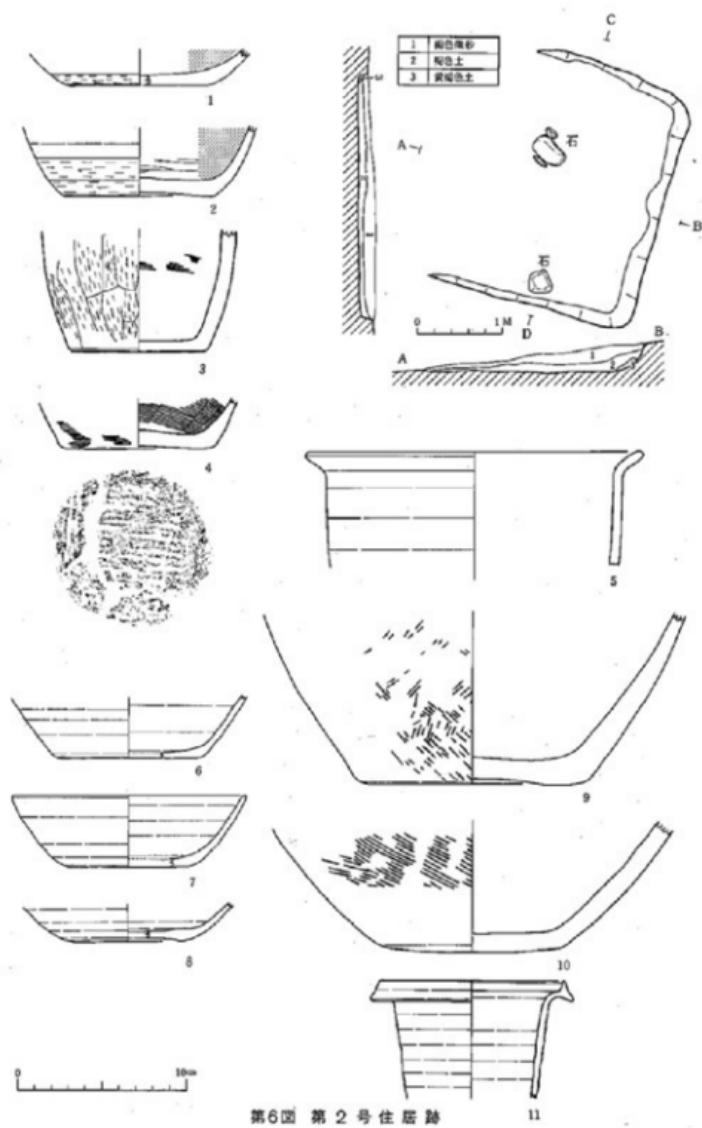
**壺**: 頸部上半から口縁部にかけての破片である（11）。頸部は直立する。口縁部は外反し端部がつまみ出されて縁帯状を呈する。

### 第3号住居跡

【位置】 西斜面上、1号住居跡の西側で検出された。

【重複・増改築】 第4号住居跡を切り、第5号住居跡に切られている。

【平面形・規模】 南壁を失っているが、平面形は方形を基調とするものと推定され、規模は東西が約3.8mである。



第6図 第2号住居跡

**【壁】** 地山を壁としている。壁高は最も高い北壁中央部で29cmであり、ほぼ垂直に立ち上がる。

**【床面】** 地山を床としている。残存部では、ほぼ平坦である。

**【柱穴】** 床面上から、ピットが7個検出されているが、柱痕跡が確認されているピットではなく、配置に規則性もみられない柱穴と推定されるものは認められない。

**【カマド】** 東壁で2基、北壁で1基検出された。この3基のカマドの新旧関係は不明である。

第1号カマド—東壁中央部に位置している。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は底面に20×40cmの範囲で焼面が認められたのみである。煙道部は長さ90cm、幅14cmで燃焼部底面より一段高い部分からび、先端に煙出しピットがみられる。煙道部底面は煙出し部に向って高くなる。軸方向はN-66°—Eである。

第2号カマド—東壁南よりに位置している。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部は底面と思われるところに約20×40cmの範囲で焼面が認められる。煙道部は長さ約60cm、幅18cmで燃焼部底面より一段高い部分からび底面はほぼ水平である。軸方向はN-84°—Eである。

第3号カマド—北壁西よりに位置している。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部は側壁の一部が残存し、底面に30×46cmの範囲で焼面が認められた。煙道部は長さ56cm、幅24cmで、燃焼部底面より一段高い部分からび、底面は先端に向って高くなる。軸方向はN-25°—Wである。

### 【出土遺物】

#### 土師器

**壺**：製作にロクロが使用されている。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。底部の切り離しはヘラ切り技法によるもの（1）と回転糸切り技法によるもの（2）がある。いずれも再調整はみとめられず、ロクロの回転方向は右である。

**甕**：最大径は口縁部にあり、長胴形をなすものと思われる（3）。体部の調整は外面にヘラケズリ、内面にナデがみられる。

#### 須恵器

**壺**：底部は回転糸切り技法で切り離されている（4）。再調整はみとめられない。ロクロの回転方向は右である。

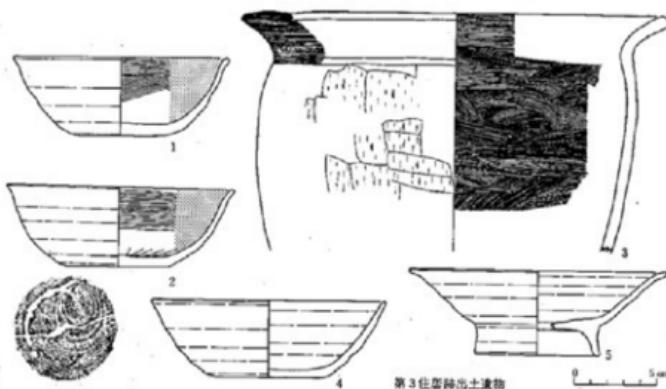
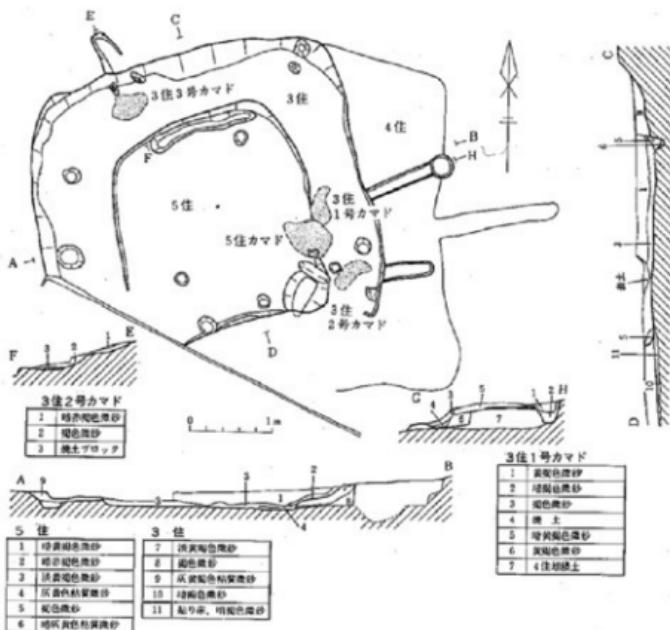
#### 赤焼土器

**高台付壺**：直立する高い高台がつく（5）。内外面ともロクロ調整されている。

### 第4号住居跡

**【位置】** 西斜面上、第1号住居跡の西側で確認された。

**【重複・増改築】** 第3号住居跡と第5号住居跡に切られている。



第7図 第3・5号住居跡

**[平面形・規模]** 東壁と北・南壁の一部が残存するのみで、全体形は明らかでないが、平面形は方形基調と思われ、規模は南北が約3.4mである。

**[壁]** 地山を壁とし、壁高は最も高い北東隅で38cmであり、立ち上がりはゆるやかである。

**[床面]** 地山を床としている。床面はほぼ平坦である。

**[柱穴]** 住居の残存範囲内からピットは3個検出された。いずれも柱痕跡は確認されておらず、配置に規則性もないので柱穴がどうかは不明である。

**[周溝]** 認められない。

**[カマド]** 東壁中央部に位置している。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部は底面と思われるところに径40cmの範囲で焼面が検出されたのみである。煙道部は長さ1m、幅20cmで燃焼部底面より一段高い部分からのび、底面はほぼ水平である。先端に煙出しピットがみられる。軸方向はN-80°-Eである。

**[貯蔵穴状ピット]** カマドの右(1号)、左(2号)にみられる。1号からは遺物が出土している。

#### **[出土遺物]**

##### **土師器**

**坏:**製作にロクロが使用されている。底部の切り離し技法はヘラ切り(1,2)、回転糸切り(3)、再調整のため不明(4)の三者がみられる。ヘラ切りのものは切り離し後回転ヘラケズリが加えられており、その位置は(i)体部下端から底部にかけて(ii)底部とがある。回転糸切りのものには再調整がみられない。不明のものは底部に手持ちヘラケズリが加えられている。なお、前二者のロクロ回転は右方向である。いずれも内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

**甕:**製作にロクロが使用されている(5)。最大径は口縁部に位置し、内外面ともロクロ調整されている。

#### **第5号住居跡**

**[位置]** 西斜面上、1号住居跡の西側で確認された。

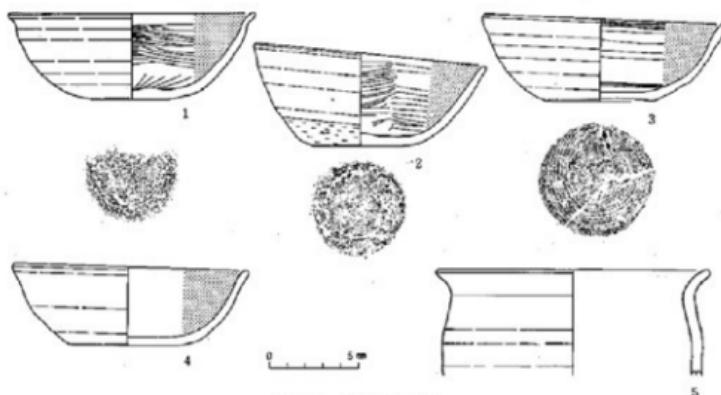
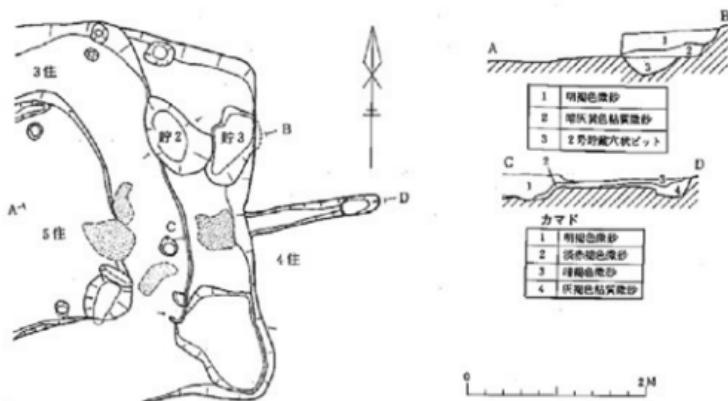
**[重複・増改築]** 第3号住居跡と第4号住居跡を切っている。

**[平面形・規模]** 平面形は長軸約2.4m、短軸約2.3mの隅丸方形である。なお削平により南西隅を失っている。

**[壁]** 地山を壁とし、ほぼ垂直に立ち上がる。

**[床面]** 地山を床としている。床面はほぼ平坦で固くしまっている。

**[柱穴]** 床面上から4個のピットが検出されているが、いずれも柱痕跡は確認されておらず配置に規則性もみられないでの、柱穴がどうか不明である。



第8図 第4号住居跡

ろに径40cmの焼面と側壁に使用したと考えられる焼けた石がみられる。

【貯藏穴状ピット】 南東隅に認められた。遺物は出土していない。

【出土遺物】 遺物は全く出土していない。

**【周溝】** 北東隅から北壁沿いに検出された。幅20cm、床面からの深さは5cmで、断面形は「U」字形である。

**【カマド】** 東壁南よりに位置している。燃焼部の一部が残存しており、底面と思われるところ

## 2. ピット

第1号住居跡の北側で10個のピットが検出された。形状・規模は様々であり、柱痕跡はみられず、配置に規則性もみられない。遺物は出土していない。

## 3. 表土・層位不明の遺物

### 縄文土器

体部破片である(1)。隆線と沈線によって斜行縄文(R L R)の部分と無文の部分とが区画されている。中期後半のものと思われる。

### 土師器

坏：製作にロクロが使用されており、内面はヘラミガキ・黒色処理されている(2~4)、底



第9図 表土・層位不明の遺物

部は回転糸切り技法で切り離され、再調整はみられない。ロクロの回転方向は右である。

**壺**：長大径が口縁部に位置し、口径が器高より大きい鉢形の甕である（5）。体部の調整は外面がヘラケズリ、内面は磨滅のため不明である。

### 須恵器

**高台付坏**：低い高台が付く（6）。底部は回転糸切り技法によって切り離されている。

**鉄製刀子**：（8）は茎の、（9）は身の破片である。いずれも銹化が激しい。身は平造りと思われる。

**鉄製釘**：（7）は角釘で、項部が折曲げられている。

**石鎌**：（11）は無茎の鎌である。基部はくぼみ丸みをもち、先端を欠く両面に調整剝離が施されている。（10）は半欠品である。

第1表 国示土器分類表

埋蔵番号	登録番号	出土地点	種別	器形	分類	第6図 9	61	2往 B - I	須恵器	壺	
第5図1	5	1往 床 面	土師器	坏	IIb		10	60	* A - I	*	*
	2	* *	*	*	*		11	22	* B - I	*	壺
	3	9	*	*	*	*	第7図 1	1	3往 壺	2	土師器
	4	26	* 煙道	*	窯	A II	2	6	* A - I	*	IIb
	5	23	*	*	*	*	3	24	* B-カマド	*	壺 A II
	6	21	* 床 面	*	*	B	4	3	* A - I	須恵器	坏 II
	7	21	*	*	*	*	5	7	* B-カマド C - *	赤陶土器	高台付坏
	8	35	* C - 4	須恵器	环	II	第8図 1	16	4往 1号野藏穴	土師器	环 Ia(?)
	9	59	* 床 面	*	壺		2	4	* 床 面	*	Ia(?)
第6図1	41	2往 A - 1	土師器	坏	IIa		3	17	* 1号野藏穴	*	IIb
	2	20	*	*	*	IIa	4	15	* A - 3	*	IIb
	3	62	* D - 2	*	更	A	5	54	* B - I	*	壺 B
	4	25	* A - 1	*	*	*	第9図 2	19	L-41 真 土	土師器	环 IIb
	5	55	* B - 1	*	*	B	3	12	O-41	*	*
	6	36	*	*	須恵器	环 I	4	14	O-34	*	*
	7	8	*	*	*	*	5	57	K-42	*	壺 A II
	8	34	* 1 層	*	*	II	6	10	M-27・28 *	須恵器	高台付坏

## IV 考 察

### 1. 出土土器の分類

#### 〔土師器〕

##### 坏

坏はいずれも製作にロクロが使用されている。底部の切り離し技法と外面再調整の有無によって以下のように分類される。

I類—ヘラ切り技法によって切り離されているもの。

Ia類—調整有り一回転ヘラケズリ (i 体部下端～底部、ii 底部)

Ib類—再調整なし

II類—回転糸切り技法によって切り離されているもの。

IIa類—再調整有り一回転ヘラケズリ (体部下端)

IIb類—再調整なし

III類—切り離し技法が不明のもの。

再調整有り (a 回転ヘラケズリ・体部下端～底部、b 手持ちヘラケズリ・底部)

##### 甕

甕は製作にロクロが使用されていないものと、使用されているものとがあり、前者は器形によって分類され、次のようになる。

A類—ロクロ不使用(最大径は口縁部)

A I 類—長胴形のもの(口径<器高)

A II 類—鉢形のもの(口径>器高)

B類—ロクロ使用

#### 〔須恵器〕

##### 坏

坏は底部の切り離し技法によって、I : ヘラ切り、II : 回転糸切りとに分かれる。いずれも再調整はみとめられない。

##### 高台付坏・甕

これらは図示できた個体が少いため分類は行なわなかった。

#### 〔赤焼土器〕

高台付坏が1点出土しているにすぎない。

## 2. 出土土器の年代

出土土器のうち、住居跡において共伴関係が成立するものは第2表に示したとおりであり、土師器の坏 I a、II b類、甕 A I・II、B類と瓶、須恵器甕、赤焼土器高台付坏が組み合っている。

これらの土器は、土師器坏がロクロ使用という表杉ノ入式の特徴を備えているところから同時期に比定される。

このほかの土器は、土師器坏 I b、II a、III a・b類はロクロ使用の点から表杉ノ入式に属し、各須恵器は他の集落遺跡では坏 I 類が国分寺下層の土師器に、坏 II 類と高台付坏（回転糸切り）は表杉ノ入式の土師器に共伴していることが多い。また、土師器甕 A II 類、須恵器甕については時期を明確にできないが、本遺跡出土土器の大半が表杉ノ入式期のものであることから同時期に属する可能性が強い。

第2表 図示土器集計表

出土地点	器 形	土 师 器										須 恵 器				赤焼 高付 台坏
		坏					甕			瓶		坏		高付	甕	甕
		I a	I b	II a	II b	III a	III b	A I	A II	B	I	II	台坏	甕	甕	
1住	4 層													1		
	床				3							2				1
2住	煙道											2				
	1 层					1		1			1			2	1	
	2 层										1			1		
3住	1 层					3										
	2 层			1												
	2号カマド									1						1
4住	1 层					1					1					
	3 层						1									
	床	1										1				
5住	1号野體穴	1			1											
	遺物なし															
表 土・その他の				3						1					1	

## 3. 積穴住居跡の構造

5軒の住居跡について構造をまとめると次のようになる。

確認面は地山面であり、分布は1軒が調査区南端に単独で、他の4軒は北端で近接、重複している。

平面形は方形を基調としており、全体形が明らかなものは正方形であるが、いずれも多少ゆがんでいる。規模は1辺が2.3mから3.8mまでのものがある。

内部の施設としては、カマド、貯蔵穴状ピット、周溝がみられ柱穴が判明した住居跡はない。

カマドは4軒にみられ北・東・南壁、つまり地山面の傾斜に対して横あるいは上方の壁に付設されており、壁での位置は中央あるいはやや右よりである。燃焼部は側壁が粘土で構造されており、底面中央あるいは奥手にピントが検出されているものもある。煙道は天井を川原石と土器によって構築しているものが1軒ある。また、複数のカマドが検出された住居跡が2軒あり、いずれも新旧関係がつかめなかったため作り変えたものか同時に使用されたものか不明であるが、第1号住居跡では2基とも燃焼部側壁が残存しており、同時に使用された可能性が高い。貯蔵穴状ビットは3軒にみられ、カマドの左右に2個、あるいは右に1個検出された。周溝は2軒にみられ、ほぼ全周するものと、1辺にのみとめられるものがある。

このように、本遺跡で発見された住居跡の構造は同時期の他遺跡における例と基本的な違いはない。その中で、平面形のゆがみ、柱穴が検出されていないこと、カマド2基が同時使用の可能性のあるもの、貯蔵穴状ビットが2基あるものなどが本遺跡での特徴といえる。

#### 4. 遺構の年代

住居跡は出土土器の年代からみて、第1・3・4号住居跡は表杉ノ入式期に属する。第2・5号住居跡は伴出土器がなく時期不明であるが、第2号住居跡は堆積土出土土器の大半が表杉ノ入式期のものと考えられることから、同時期に近い年代である可能性が強く、第5号住居跡は第3号住居跡を切っていることから表杉ノ入式期あるいはそれ以降である。

ピットについては出土遺物がなく、時期不明であり、性格を推定する根拠もない。

第3表 積穴住居跡集計表

	平面形	規模(m)	柱穴	カマド					貯蔵穴状ビット	周溝
				付設場所	方 向	倒壊の位置	倒壊素材	煙道の種類		
1住	正方形	3.6×3.4	無	1. 南壁西より	S-12°-E	斜 薙 壤	粘 土	→	有	カマド左右
				2. 東壁南より	N-82°-E	上 方	粘 土	↗	有	
2住	方 形	2.8X	無							全周
				1. 東壁中央	N-66°-E	上 方		↗	有	
				2. 東壁南より	N-84°-E	上 方		→		
3住	方 形	3.8X	無	3. 北壁西より		横		↗		
4住	方 形	3.7X	無	東壁中央	N-80°-E	上 方		→	有	
5住	正方形	2.4×2.3	無	東壁南より		上 方				カマド右 一透

## V まとめ

1. 本遺跡は角田丘陵の北西部、丘陵西側緩斜面に立地している。
2. 今回の発掘調査の結果、5軒の竪穴住居跡と少数のピットなどの遺構と土師器・須恵器などの遺物が発見された。
3. 発見された遺構・遺物はほとんどが土師器の編年における表杉ノ入式期(平安時代)のものと思われる。
4. 調査を実施したのは遺跡のごく一部分と考えられ、今回の調査区外にも十分に遺構・遺物の存在が予想され、調査で発見された遺構・遺物の分布状況もそれを裏付けるものである。

## 引用・参考文献

- 氏家 和典 (1957) : 「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯  
小笠原好彦 (1976) : 「東北に岩げる平安時代の土器についての二、三の問題」東北考古学の諸問題  
加藤 孝 (1954) : 「塙釜市表杉ノ入貝塚の研究」宮城学院女子大学研究論文集  
桑原 滋郎 (1976) : 「須恵系土器について」東北考古学の諸問題  
(1970) : 「クロロ土師器について」歴史第38輯  
小井川和夫 (1978) : 「糠塚遺跡」宮城県文化財調査報告書第53集  
手塚 均

第4表 土器破片集計表

—内親引田遺跡—

種類	目	新石器時代	古墳時代	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
縫合	口	クローゼット	1	2	3	2	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	4																																																	

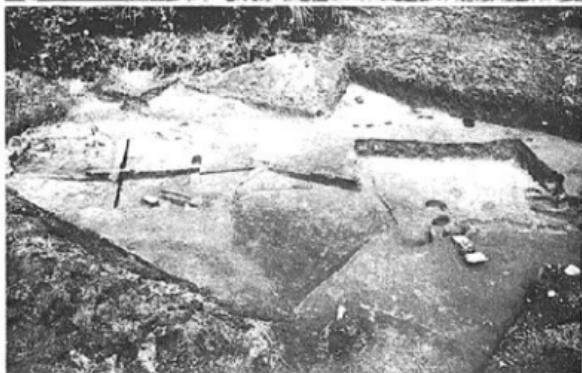
図 版



遺跡近景



同上

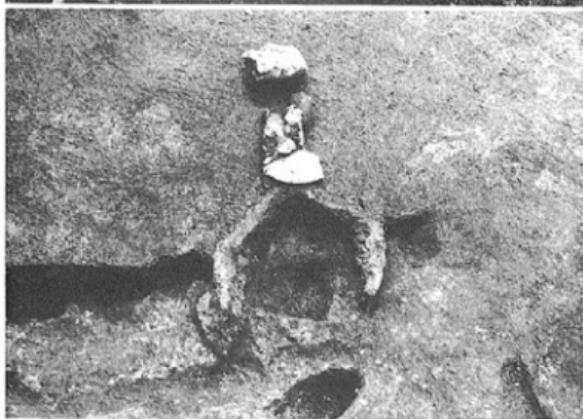


第1・3～5号住居跡

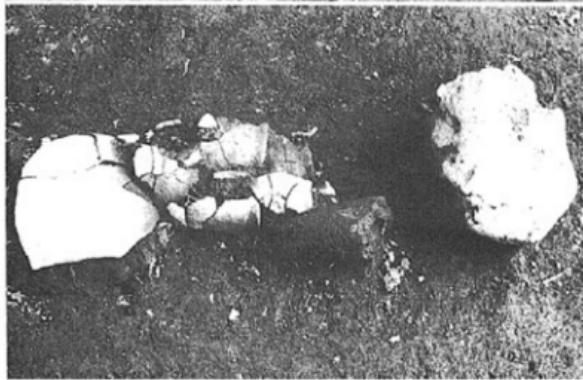
図版1



第1号住居跡

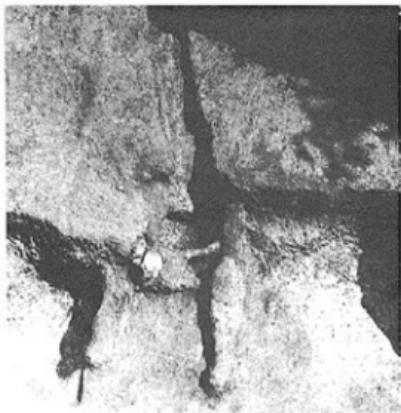


同1号カマト



同カマド焼道部

図版2



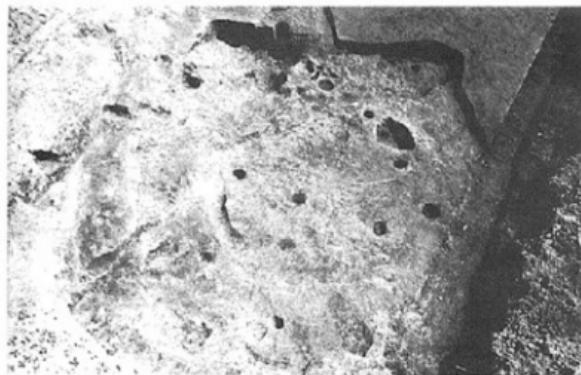
第1住居跡2号カマド



同時蔵穴状ピット



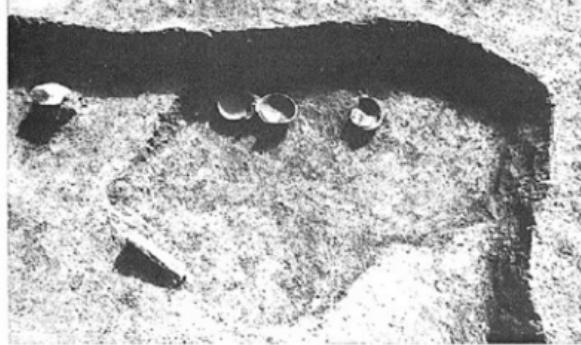
第2号住居跡



第3～5号住居跡



第3号住居跡  
1号カマド



第4号住居跡  
1号貯蔵穴

同版4



1:7図1 2:7図2  
3:8図1 4:8図2  
5:8図3 6:7図5  
7:7図3 8:5図4  
9:5図5

図版5 出土遺物